

講演会レポート④

渡部 裕太

今回の池袋学「戦後池袋の検証」ヤミ市から自由文化都市へ」では、夏期特別講座として、川本三郎氏、吉見俊哉氏、マイク・モラスキー氏をお招きし、シンポジウムが行われました。

吉見氏は、今後の池袋を考えるために、文化資源区という考え方を示されました。まず東大周辺を例として挙げ、湯島・上野・寛永寺などの区域が、徒歩圏内であることを指摘しました。その徒歩圏内の区域を文化資源区として考え、駅中心の限られた範囲でなく、歩ける距離で結ばれた、緩やかな地域設定を行うことを提唱します。それを池袋に当てはめ、池袋駅というターミナルを中心に地域形成を考えるのではなく、むしろ雑司が谷霊園という墓地を中心に、それを取り巻く大学の街として、池袋・目白・早稲田・音羽・目白・雑司が谷などが、大きな一つの地域のくくりとして考えられる、といいます。

そのために、都電を復活させる、循環バスを区の境界を越えて運用する、などの提言が

なされました。

モラスキー氏は闇市そのもの話として、闇市の飲み屋が、パリのカフェに似ている、とおっしゃいます。それは、店のテーブルが外に置かれ、入店しながらも道に、街に所属したままである、という構造上の共通点によるものだとし、店の内外が、非常に曖昧な、特権的な空間だと指摘しました。そのことがローカルな雰囲気、通りすがりの人と話しながら、飲めるような空間を形成しているといえます。

また、ヤミ市を考える際、場所だけにとらわれてはいけないと指摘しました。「いちば」と「しじょう」の両面を持つこと、そこに居る人々にとっては、戦争から連続した場であること、階級制が無化された解放区であること。流通・時間的連続・解放の三面から捉えることの必要性を強調しました。

川本氏は、池袋は若い街だとし、関東大震災による人口の移動によって、一気に発展したことを指摘しました。品川と赤羽、赤羽と上野、という三角形のなかで、路線がないのが不便だとして、開設されたのが池袋駅だとし、明治大正期にはほとんど文学作品などに

取り上げられることのなかった場所だ、といいます。

最後に吉見氏、モラスキー氏、川本氏によるパネルディスカッションが行われました。はじめに吉見氏からは、「自由文化都市」へと向かうこれからの池袋について、その「自由」の自身が気になる、という疑問が示されました。自分たちの生きている時代が自由ではない、という感覚を無意識にもっている、そこからヤミ市を語ってしまう、そして生き生きとした都市、ストリートカルチャーのようなものを、ヤミ市に見ようとしてしまうのではないか、という疑問でした。

それを受けて、モラスキー氏は、ヤミ市が自由なのは、計画都市ではなく、破壊によって前提された無秩序状態だからだとし、「自由文化都市プロジェクト」として管理下に置かれてしまうことで、自由が自己矛盾をはらむものになってしまう懸念があることを、示されました。

それに対して川本氏は、中央線沿線などにまだヤミ市的空間が残っていることを挙げ、そういった場所は勝手にできて勝手に残る、として、都市計画によってヤミ市的空間が排

除されてしまうことはないから安心して
いる、と語りました。

また川本氏は、ヤミ市が建物疎開の結果で
あり、駅が空襲で燃えないよう家を強制的に
壊したところに、勝手に入り込んだだけだと
し、手放しにヤミ市礼讃はあまりできない、
とヤミ市の負の側面も指摘しました。

ヤミ市的なるものと、都市計画と、この両
者の中でいかに池袋が発展していくか、とい
うシンポジウムになったように感じました。
ヤミ市的な「自由」は、整然とした計画都市
からは対極のところにあります。

もちろん、無秩序状態としてのヤミ市的自
由を、これからの池袋に求めることは出来な
いでしょうが、自然発生的に人々が寄り集ま
り、新しい活気の生まれる余地のある街、と
いう意味で、「池袋Ⅱ自由文化都市」を考え
たい、と思いました。

（わたなべゆうた 文学研究科日本文学専攻博
士課程後期課程 1 年次）